

# 旅する作家とアイデンティティー

## —アーネスト・ヘミングウェイの *Green Hills of Africa* (1935)を中心に

日 影 尚 之

### 1. はじめに——旅する作家ジャック・ロンドンとアイデンティティー

筆者は、19世紀末から20世紀初頭に活躍したアメリカ西部の作家ジャック・ロンドン(1876-1916)の研究をしてきたが、ロンドンは“旅する行動派の作家”だったし、そのイメージを作家自身もかなり強く意識していた。20世紀の作家アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)は、必ずしもアメリカ西部の作家というカテゴリーには収まりきらないものの、国内外をきわめて多く旅する作家だった。また、その作品には旅行中もしくはホームを離れて暮らす登場人物がよく登場する。金を採掘する者(ロンドンの作品)、金や人生を賭ける者(ロンドンおよびヘミングウェイの作品)、(疑似)巡礼の旅をする者(ロンドンおよびヘミングウェイの作品)など、様々なタイプの旅の登場人物がある。<sup>1</sup>

これは両作家に共通して言えることだと思うが、いわゆる観光旅行(観光業)あるいは観光客は否定的に描かれる場合が多い。それも多くの場合、そういう観光客は金持ちの場合が多いので、尚更マイナスのイメージ——軟弱、無能、および本物でない(inauthentic)など——で描写されることが多い。しかしながら、作品内の観光表象——観光客、観光旅行および観光産業に代表され

る消費文化を含む——が否定的に見えるからといって、作者が観光に無関係であるわけではないし、19世紀末～20世紀前半にかけての交通手段の目覚ましい発達、観光旅行の普及、そして消費文化の波は(大恐慌および第二次世界大戦をはさみながらも)作家の人生そのものを飲み込んでいく。

そこでまずは、アメリカ西部の観光産業という観点からジャック・ロンドンの晩年の作品をいくつか概観したいと思うがその前に、アメリカ西部を観光の売り物にするために重要な役割を果たした“See America First”キャンペーンについて確認しておく。19世紀後半以降のアメリカでは、大陸横断鉄道の完成、鉄道会社、自動車産業および観光関連産業の広告活動によって、アメリカ西部への観光旅行(ツーリズム)が大いに宣伝された。アメリカの国家アイデンティティー形成と結びついた“See America First”(「まずアメリカを見よう」)キャンペーンがその代表的例である。長い引用になるが Marquerite S. Shaffer は次のように言う。

The period between 1880-1940 marked the heyday of national tourism in the United States. As a national transportation and communication network manifested a national territory, as mass production and mass distribution created a national market, and as the process of incorporation redefined political, social, and economic relations in national terms, an “imagined community” embodied by the modern nation-state solidified in the United States. . . . Burgeoning tourist industries marked tourism as a ritual of citizenship, constructing a canon of brand-name American tourist attractions and inscribing a shared national history and culture across the American landscape. Tourists, in turn, took to the road to discover and consume America, positioning themselves as modern individuals and engaging in a larger dialogue about personal and national identity. National tourism depended on this corporate, urban-industrial infrastructure. Yet tourist industries created and consumed a nostalgic ideal of America as “nature’s nation.” National tourism as a form of patriotic consumption sought to reconcile this organic nationalism, which celebrated nature, democracy, and liberty with the urban-industrial nation-state that depended on extraction, consumption, and hierarchy. Thus, as the emergence of a modern consumer culture reshaped the social and cultural boundaries of the United States, national tourism helped to

imbue the nation with form and substance by imagining and legitimizing America as a modern nation. <sup>2</sup>

Shaffer の言うように、アメリカ西部の観光には特に 20 世紀以降、自動車が重要な役割を果たすことになるわけだが、作品内ではノスタルジックにも、“反自動車”(= “馬車支持”) 姿勢を見せるジャック・ロンドンに関しても、旅行・観光業とナショナル・アイデンティティー意識を読み取ることができる。サンフランシスコの郊外で、ナパに次いでワイナリーで有名なソノマにはジャック・ロンドンの建てた農場兼屋敷があった(原因不明の火事で焼失)が、ソノマという理想の地(新しいホーム)を見つけるまでの(疑似巡礼的)旅を描いた小説 *The Valley of the Moon* (1913) では、主人公のカップル(Billy と Saxon)をはじめ、他の登場人物たちが、自分たち白人(特に Anglo Saxon)こそアメリカを開拓し、国を築いてきた「本物のアメリカ人」だ、という(言うまでもなく人種差別的な)発言を繰り返す。旅の途中で Carmel に滞在した際、このカップルは充実した楽しい「休暇」(“vacation”)をすごしたと書かれている。Carmel Beach では Jim Hazard という男が “surf swimming”(「サーフィン」)をしていたと書かれている。また、有能な馬車の御者だった Billy は、(アメリカ東部からやってきた)裕福な観光客たちを馬車に乗せて観光スポット Seventeen Mile Drive を案内する仕事をする。人種差別的な発言の背景には、世紀転換期に大量の「新移民」が増えたこと、アジア系など非白人移民が多かったこと、などがある。また、産業化および都市化の進行により、「古き良きアメリカ」、ジェファソンの独立自営農民 (yeoman) の理想は過去のものになっていた。都市から逃げ出して農園を経営する *The Valley of the Moon* の主人公たちの行動は、そうした現実に対するパニックあるいは危機感の現われでもある。<sup>3</sup>

先程も引用した Marquerite S. Shaffer によれば、この時代の「旅行文」(“tourist literature”)および “See America First”運動は、そうした危機感に対する「癒しの意味」(“the therapeutic meaning”)があったと指摘する。その意味は、アイデンティティーの再確認と言い換えてもよいだろう。

These [tourist] narratives reveal a diverse series of underlying anxieties that suggest that individual tourists took to the tourist landscape, not only

for pleasure but also to discover or invent an America in which they, as white, native-born, upper-and-middle-class citizens, threatened by increased immigration, labor unrest, racial diversity, and a sense of powerlessness and “weightlessness” manifested in modern urban-industrial living, could regain some sense of identity, security, and control.<sup>4</sup>

The America these tourists saw and eulogized looked back nostalgically to a Jeffersonian ideal of an American society composed of independent yeoman landholders or farmers living in a pastoral setting. ... [B]oth promoters and participants took part in the discourse surrounding an ideal America that resulted from a growing uncertainty surrounding the social and cultural relations of urban-industrial life.<sup>5</sup>

つまり、激動と混乱に見える現実のアメリカを目の当たりにして、旅行に出ることで“本当のアメリカ”を取り戻そう、アメリカならではのこんなすばらしい光景がアメリカ国内にある、こんなすばらしいアメリカ人がいるのだ、と呼びかけることで、アメリカ人のアイデンティティを再確認する機会を観光業が提供したという考え方である。中西部育ちのヘミングウェイがスペイン(闘牛)やアフリカ(狩猟)に求めたのも、自分の生きるアメリカには失ったもの、失くしてしまったと感じているもの——その中には「男らしさ」あるいは“古き良きアメリカ”的なものがある——であった。

## 2. ヘミングウェイと旅

ここでは Russ Pottle にしたがって、ヘミングウェイと旅についていくつか確認しておこう。<sup>6</sup> ヘミングウェイの時代にはすでに、鉄道はアメリカを含む世界各地でかなり普及しており、南極大陸を除く全大陸に旅客用の鉄道が運行していたという。そしてヨーロッパの鉄道の場合、速さというよりも正確さおよび豪華さが競争の対象だった。第一次世界大戦後のヘミングウェイの旅——フランス、スイス、『トロント・スター』紙の記者として行ったギリシアおよびトルコ、オーストリアでのスキー休暇、キーウエスト在住時のマイアミと出版社のあるニューヨーク間の旅、晩年のアメリカ西部（アイダホ

州)の住居とキューバ間の旅——は安定した鉄道交通なしには不可能であった。また、*The Sun Also Rises* の終盤で、主人公 Jake Barnes が Brett Ashley に突然呼び出されてサン・セバスチャンからマドリードに向かう前、「急行で明日マドリードに行く」という電報を自信をもって彼女に打つことができるのは、列車が信頼できる交通手段として発達していたからである。

ヘミングウェイの生きた時代の旅客船については、1912年のタイタニック号の沈没や戦時中の軍用船化は別だが、信頼できる定期船が就航していた。1918年大西洋を渡ってイタリア戦線に向かった時、1933-34年および1953-54年のアフリカへのサファリ旅の時、3番目の妻マーサ・ゲルホーンと中国方面に取材に行った時、1959年スペイン旅行から戻る時など、ヘミングウェイは何度も定期船(および軍用船)で海を渡っている。

自動車と“See America First”キャンペーンについては前節でも述べた通りだが、この運動が総じてアメリカ東部人を雄大なアメリカ西部へと誘うものであったとすれば、ヘミングウェイの場合はそのメッセージをもっと広い地域に応用したことになるのかもしれない。飛行機についても、1903年のライト兄弟による飛行成功、1927年のチャールズ・リンドバーグによる大西洋横断単独飛行など、ヘミングウェイの生きた時代におけるその発達が目まじしい。1920年代ヘミングウェイは最初の妻ハドリー・リチャードソンとパリ＝ストラスブール間の飛行体験をしており、天候による揺れや着陸時の体感などを率直に文章にしている。1920年ころまでにはキーウエスト＝ハバナ間は旅客機が通っており、1930年代ヘミングウェイの2番目の妻ポーリーン・ファイファーは何度もキーウエスト＝マイアミ間で飛行機を利用しているし、ヘミングウェイ自身もキーウエストから出版社のあるニューヨークに行くのに飛行機をさかんに利用した。

総じて、どの交通手段の場合も、技術的進化につれて利用者は富裕層から中産階級にまである程度及ぶようになり(大西洋定期航路の場合はアメリカ移住を求める下層階級も利用した)、交通産業、旅行産業、その他の関連産業は利用客(特に観光客)を集めるための宣伝活動を展開する。観光旅行および観光客に対しては否定的な立場を表明するヘミングウェイだが、キーウエスト＝ハバナ路線から成長したパン・アメリカン航空のヨーロッパ旅行を宣伝する雑誌広告(1959年)には晩年のヘミングウェイ自身が登場し、「パン・アメリカン航空と私は古い友だちです」というフレーズまで付いている。いくら交

通手段が一般化・大衆化していくとは言っても、旅の移動には相当な費用が必要だったことも確かで、特に、例えばヘミングウェイの一度目のアフリカ旅行 (*Green Hills of Africa* で描かれる) には、1933年当時の値段で約25,000ドルかかったのであり、2人目の妻ポーリーンの叔父ガス・ファイファーが費用を出してくれたからこそ行くことができた。

ヘミングウェイの反ツーリズム傾向の理由は、文化的理解の欠如に対する嫌悪ということである。実際、多くの観光地用ガイドブックが出版された時代であり、パリの通りにせよ、スペインの闘牛場にせよ、フロリダの海岸にせよ、アメリカ西部のリゾート地にせよ、キューバの港街にせよ、呑気な(アメリカ人)観光客が押し寄せて、何も理解せず見て回る態度には個性・真性(authenticity)がないと考え、そんな“アウトサイダー(部外者)”の彼らと自分とを区別したがつている。真の冒険家として反観光旅行、旅には危険とハプニング(偶然)がつきものと考えていた(少なくともそのように見せたかった)のであろう、ヘミングウェイは旅の途上でよく怪我を負ったり、病気に罹ったりしている。戦争や貧困のため故郷を追われて、徒歩でのつらい移動を余儀なくされる人々、重要な場面で便利で楽な乗り物ではなく自分の足で歩いたり、手で漕いだりする登場人物たち、などはそうしたヘミングウェイの思いの表れなのかもしれない。

### 3. 戦間期旅行文学とヘミングウェイの *Green Hills of Africa*

Paul Fussell は戦間期の旅行文学についていろいろ述べているが、例えば、それは雑多な話題に関するエッセイ集を作家が出版してもらうための一種の「方策」だったとも言う。1933～34年のアフリカサファリ体験を元にヘミングウェイが書いた *Green Hills of Africa* (以下 *GHA*) についても Fussell は、すべての現代アメリカ文学はマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』から始まるというあの有名なコメントを含む最初の部分は、ストレートな文学論ではいかにも“インドア派”に聞こえ、“アウトドア派”作家ヘミングウェイのペルソナには合わない。だから、アフリカの大地(文字通りの屋外またはテントという準屋外)を舞台にして、しかも Kandinsky というオーストリア人に質問されてやむを得ず答える形で作家談義を展開する設定になっていることに意味がある、と指摘する。<sup>7</sup>

Emily O. Wittman はスペイン闘牛記としての *Death in the Afternoon* (1932) を *GHA* と並べて論じているが、ここでは後者に絞ってまとめてみる。<sup>8</sup> よく知られているように、ヘミングウェイのアフリカに対する憧れは、子ども時代からのものであり、シカゴの自然史博物館 (Field Museum of Natural History) で探検家 Carl Akeley の持ち帰ったアフリカゾウの展示に魅了され、また、冒険家でアメリカ大統領にもなったセオドア・ローズベルトのサファリ記 *African Game Trails* を貪り読んだという。作者は *GHA* の序文でユニークな「真実の本」を書こうとしていると表明しているが、彼はアフリカを描いた数多くの文学や旅行記・探検記を読んでいたため、それらの文学伝統の影響を少なからず受けている。ヘミングウェイは *GHA* を執筆するにあたって、自身のサファリ体験で撮影した写真や取ったノートのほか、このトピックについていろいろな本で入念に調べ上げたらしく、彼のキーウエスト宅にはサファリに関する数多くの書籍が並んでいた。そこで描かれる「アフリカ」は具体的な場所というよりはイメージとしての「アフリカ」というべきもので、戦間期に多くの英米作家たちを魅了したものである。こうした旅行記は、様々な危険、困難、孤独を描くことで、ツアー旅行にはまねのできない、独自の試練の旅というポーズを取る文学上の場をこれらの作家たちに提供した。

そうした旅行記の特徴は、苦難の描写、話の脱線、ノスタルジックなトーン、そして原始的・未開(とされる)文化の描写などであり、また、第一次世界大戦の影がちらついている。*GHA* の場合、アフリカで動物狩り(動物殺し)をしている自分と戦争で死を目の当たりにし、負傷してきた自分を結びつけて、自らの殺しの行為をいわば正当化しようとしたり、トルストイなどを例に挙げて戦争体験が作家にとって(語りの正当性の面で)いかに有利な体験であるかについて書いたりしている。また、*GHA* で何度も描かれる行為(アクション)——先回りして相手を待ち伏せしたり、相手からは見えない場所に身を潜め、わずかな隙間から狙いを定めて撃つなど——は、戦争で敵を狙い撃つ様子を思い起こさせる。

*GHA* で語り手かつ主人公の私=ヘミングウェイは、リアリティーを再現するために、現地で罹った伝染病との闘いをやや大げさな言葉で表現したり、現地語の一つらしきスワヒリ語の会話を挿入したりする。また、話の脱線や雑多性が許される旅行記の特性を利用して、先述のような文学談義を差し挟むほか、エロティックなエピソードまたはイメージも入っている。「アフリカ」

では西欧社会の慣習や基準では抑圧されるものが解放されるということである。メキシコ湾流 (“Gulf Stream”) を思い出す、長い印象的な描写にも、突然性的なイメージが漂ってくる。David Spurr はヘミングウェイのアフリカ観について、男の「飽くなき(満たされることなき)性的所有」 (“insatiable erotic possession”) と表現し、完全無制限に占有・所有したい女でありながらもそれはかなわず、時間的・空間的制限に制限される現実を常に意識する、と述べている (171)。“the eroticization of the colonized”(「アフリカ大陸のような植民地=愛人 mistress 観)は、西欧の男性作家に見られるもので、ヘミングウェイもその一人である。<sup>9</sup>

#### 4. *Green Hills of Africa*に見る矛盾・葛藤と作家の仕事

*GHA* は、大きな獲物の追跡またはそうした大物の獲得によるまわりからの承認を追求するアクションをさんざん描きながらも、同時にその不可能性または空虚さをも読者に印象づける意味で矛盾に満ちている。全体としてノスタルジックなこの作品では、歴史的時間軸上で既に進化=近代化してしまったアメリカから「アフリカ」という名の「緑の丘」という楽園に、クーズー狩りの目的でやってきた旅人の語り手(ヘミングウェイ)が、その無時間・無制限の「自然」に没入し(たい)ながらも、決して浸り続けることはできないのであり、「現実」の時間や制約に苦悩する。

ここでは、Ann Putnam の論に依拠しながら *GHA* の矛盾について考えてみる。<sup>10</sup> Putnam によれば、それは、ヘミングウェイの自然に対する相矛盾する態度としても現われているという。一方で自然に溶け込み自然を尊重する衝動や行動がありながら、他方でどうしてもその自然を征服し、破壊しようとしてしまう。だから、一方で「パストラル」な夢を想像/創造しながらも、他方でその喪失をはっきりと記録することになる。Putnam によれば、そのような矛盾はいろいろな形で作品に現われているという——詩的文体と叙述的文体、静と動、回想と行動(アクション)、(自然に対する)鑑賞と征服、畏敬と破壊など。

見ること(どのように見るか)はヘミングウェイにおいてはその人物の価値・精神的レベルと結びついており、一時的滞在者である語り手は、「パストラル」な風景(自然)を私利私欲のない純粋な目で、その美しさを静かに見て愛でて



いたはずなのだが、その愛すべき風景(自然)を、この語り手は銃の照準からも見る。「パストラル」な自然とは、ヘミングウェイにとって「ホーム」のような、馴染みのある理想の「良い国」であり、分け入りがたい森の奥や沼地や海図にもない海の奥深くなどではない。しかし、すぐにそこに狩りという自然を征服する欲望、他よりも大きな獲物(より大きな角)を獲得したいという欲望が芽生える。妬み、競争意識、獲物を獲得するための卑怯な作戦に汚された自然はもはや「楽園」ではないし、そのような自分もはや純粹ではない。楽園の喪失は避けられない運命である。Putmanによれば、そのような矛盾は、語り手が最も強く探し求めるクーズー(アフリカの大型レイヨウ)、即ち一種神話的イメージを帯びた動物、捉えがたい、まるで半分幻覚のような存在にも表れる。3日間追跡を続けるが、現われては消え、優しい目と女性的な美しい曲線を描く首やボディーと巨大で力強く突き伸びる角を併せ持つ(両性具有性)。

*GHA*の悲劇性を最も象徴するのは、語り手が「パストラル」な「アフリカ」の風景を静かに見て、描写・堪能しながらも、その世界に侵入するハンターとして(銃を手にし、ジープに乗る)自分を意識することである。作品の冒頭で、獲物を静かに待ち伏せしているときに、耳障りなエンジン音を響かせてトラックが近づいてくる場面は、中尾秀博らも指摘する通り、レオ・マークスのいう「楽園のなかの機械」である。<sup>11</sup> 旅人として、現地に滞在できる期間が限られていることおよび雨季になる前に狩りをしなければならないことなどの時間的制約に対処するには、自動車を使わざるを得ないが、そのサファリ・ジープは「ヴァージン・ランド」としての土地に車輪の(傷)跡を刻みつける。ジープが通れるように(障害になる)下草を狂ったように刈り、その後を車輪が草を踏みつけて進む。自分にとってスプリングフィールド銃は引き金を引きやすく、手に馴染んだお気に入りの銃である。

クーズー狩りの10日目の夕方という時間から始まる *GHA* は、もうあまり時間がないという動かぬ現実を枠として提示しながら、Part IIの回想をはさみ、Part IIIのあと2日しかないという時間に戻る。焦りと混乱のPart IIIでのクーズー狩りは“phantom”(Putnam, p. 104)のような動物を追いかけて、本当にいるのか不安を抱き、必死にその存在を信じようと努め、遂に見つけた獲物を手で触って確認しようとさえる。Kandinskyとの文学談義でハンターも作家も、様々な状況、とりわけ時間的制約に縛られているが、喪失の運命

にある、捕/捉らえ難いものを捕/捉らえようとする悲劇的な探究者であることが示唆されている通り、*GHA* は狩りについての本であると同時に書くこと(作家、芸術)についての本でもある。クーズーを殺した直後、日が暮れぬうちに急いで写真で撮影しておこうとするのも、変わらぬうちに写真に留めておこうとする行為だが、それも語り手には不十分である。作品の最後で、ガリラヤ湖畔での P. O. M. (妻)らとの会話でも示唆されるのは、永遠に変わらぬものとして捕/捉らえる記憶の力 (remember) の限界である。そして、最後に残る方法は、自分の書く本(作家の作品)によって捕/捉らえることである。*GHA* のエンディングは以下の通りである。

“You know,” P. O. M. said. “I can’t remember it. I can’t remember Mr. J. P.’s face. And he’s beautiful. I think about him and think about him and I can’t see him. It’s terrible. He isn’t the way he looks in a photograph. Already I can’t see him.”

“You must remember him,” Karl said to her.

“I can remember him,” I said. “I’ll write you a piece some time and put him in.”<sup>12</sup>

## 5. むすび——スタイル探求そのものの主題化(辻 秀雄の論を借りて)

前節の最後に触れた文学を書くこと、あるいは作家の仕事の意味として、辻 秀雄<sup>13</sup> は、「内容と形式の関係性としての動的な過程」をスタイルと呼び、そのようなスタイル理解に立脚して *GHA* を「文学実践そのもの」として読み解こうとする。つまり、スタイルとは「ある作品に内在すると同時に、その作品の外部[他の芸術家・作家つまり自分を取り囲む環境]とも不可分である。スタイルとは、他との対話において個が現出する関係、葛藤の謂いなのである。」と述べる。

ヘミングウェイにとってのアフリカは、「その不在が一層価値を高めるような何かなのであり、それは愛する女性と過ごした[もはや過ぎ去った]時間を後から愛しむような感覚を彼に抱かせる」とし、トルストイが文学の土地表

象を通してその土地(ロシアの地)を生き永らえさせたように、ヘミングウェイも「アフリカをして文学上に生き永らえさせることを夢見[た]」という。*GHA* が示唆するのは、「空間表象の結果がスタイルになるのではなく、空間表象の仕方にまつわる試行錯誤の過程、つまり文学実践の形跡こそがスタイルだということなのだ。」そして辻は、そのような「スタイル探求」そのものを主題にした *GHA* の意義を次のようにまとめる。

通常モダニズムのスタイルが問題にされる場合、その形式的実験という側面に光があてられることが多い。しかし、[リチャード・]ポワリエは、スタイルの探究自体が主題となる文学としてモダニズムを説明しており、それは『アフリカの緑の丘』がアフリカの空間表象を美学的に定義しようとする過程として成立していることと同じ論理によると考えられる。だとすると、自らの文学実践を「真実に書く」こととして打ち立てるヘミングウェイのふるまいは、他の文学者や芸術家に対する挑発的な言明、すなわち他との関係において範例となりながら自らの独自性を表明する「宣言」ともとらえられるのではないだろうか。モダニズム文学におけるスタイルの探求の主題化とは、その探求という所作自体が他に対するメッセージになるということなのかもしれない。<sup>14</sup>

以上、*GHA* の時間軸上の意図的構成、「前書き」における大胆な宣言、内容的には旅行記(アフリカ狩猟記)でありながらそうともいいきれず、重要な文学論も含み、様々なジャンルにまたがるこの奇妙な作品の様々な読解について紹介してきた。特にそこに内在する葛藤をいわば小説のように読むことは、その悲劇性を味わう点で重要だと思われる。本稿に至る筆者の問題意識は元々「ヘミングウェイと旅」というところからであったが、旅行記に収まらない *GHA* 解釈に論点に移ったため、全体としてやや散漫な構成になったが、いずれにしても、*GHA* がヘミングウェイの著名な小説に劣らぬ重要な位置を占める可能性があると言えるだろう。

注

1. 例えば H. R. Stoneback は “Pilgrimage Variations: Hemingway’s Sacred Landscapes” という論文のなかで、ヘミングウェイの描く旅は一種の「巡礼」と指摘する。 “[t]he ever-recurring center of Hemingway’s work, then, is the notion of pilgrimage. Pilgrimage, in its many avatars, serves his fiction as deep structure, as externalized mysticism, as road map to the sacred landscapes of his fiction[.]” Linda Wagner-Martin, ed. , *Hemingway: Eight Decades of Criticism* (East Lansing: Michigan State UP, 2009), p. 459.
2. Marguerite S. Shaffer, *See America First: Tourism and National Identity, 1880-1940* (Washington, DC: Smithsonian Books, 2001), pp. 309-310.
3. 詳しくは拙論「ジャック・ロンドンと消費文化—*The Game* と *The Valley of the Moon* の場合」『麗澤レビュー』13 (2007), pp. 60-81 参照。
4. Shaffer, p. 229.
5. Shaffer, p. 234.
6. Russ Pottle, “Travel.” *Ernest Hemingway in Context*, eds. , Debra A. Modellmog and Suzanne del Gizzo (Cambridge: Cambridge UP, 2013), pp. 367-377.
7. Paul Fussell, *Abroad: British Literary Traveling Between the Wars* (Oxford: Oxford UP, 1980), pp. 25-26.
8. Emily O. Wittman, “Travel Writing.” *Ernest Hemingway in Context*, . eds. , Debra A. Modellmog and Suzanne del Gizzo (Cambridge: Cambridge UP, 2013), pp. 378-388.
9. David Spurr, *The Rhetoric of Empire: Colonial Discourse in Journalism, Travel Writing, and Imperial Administration* (Durham: Duke UP, 1993), pp. 23-24.  
Spurr のもう一つの重要な指摘は (23-24)、クーズー狩りの最中のあるエピソードについてである。狩りの最中に語り手(=ヘミングウェイ)が双眼鏡で見ていた光景(フレーム)の中をマサイ族の一人がたまたまたま通りかかり、語り手がふざけてそのマサイ人を撃つまね(ふり)をしたところ、Garrick という (無能で) “大げさな” マブル人の現地ガイドが、あれは人間だ、人間だ、撃ってはだめだ! と大騒ぎしたというエピソードである。西欧的植民地支配秩序への吸収を拒否するかに見えるマサイ部族であっても、西欧白人男性の銃の照星に入る(ねらいを定めることができる)ことは、西欧白

人の力を恐れるアフリカ人(被植民地人)の心理を皮肉にも表している。  
Spurrによれば、撃つ“ふりをする”(が撃つつもりはない)このジョークは、  
例えばスタンレーのようなかつての西欧人探検家なら対象を普通に撃つ(殺  
す)つもりでしか照準を合わせることはなかつただろう時代との違い、ア  
フリカ探検およびその報告を堂々で行えた19世紀との違い、20世紀開始  
からもう数十年もして遅れてアフリカにやってきたヘミングウェイが先輩  
探検家と同じことは(ふりでしか)できないという立場との違いを示してい  
る、と言う。

10. Ann Putnam, “Memory, Grief, and the Terrain of Desire: Hemingway’s *Green Hills of Africa*.” *Hemingway and the Natural World*, ed. by Robert E. Fleming (Moscow, ID: U of Idaho P, 1999), pp. 99-110.
11. 中尾秀博「幸福の追求の追跡の幸福——「アフリカの緑の丘」について」『ヘミングウェイを横断する テクストの変貌』日本ヘミングウェイ協会編 (東京: 本の友社, 1999年), pp. 228-239.
12. Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa*. 1935. (New York: Scribner Classics edition, 1998), p. 207.
13. 辻 秀雄「ヘミングウェイのスタイル宣言——文学実践としての「アフリカの緑の丘」」『アーネスト・ヘミングウェイ 21世紀から読む作家の地平』日本ヘミングウェイ協会 編 (京都: 臨川書店, 2011年), pp. 174-190.
14. 辻 秀雄, p. 187.

## 参考文献

Bendixen, Alfred, & Judith Hamera, eds. *The Cambridge Companion to American Travel Writing*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.

Fussell, Paul. *Abroad: British Literary Traveling Between the Wars*. Oxford: Oxford UP, 1980.

Hemingway, Ernest. *Green Hills of Africa* (1935). New York: Scribner classics, 1998.

- Lounsberry, Barbara. "The Holograph Manuscripts of *Green Hills of Africa*." In *Hemingway: Eight Decades of Criticism*. Ed. Linda Wagner-Martin. East Lansing: Michigan State UP, 2009.
- Mandel, Miriam B. "Configuring There as Here: Hemingway's Travels and the 'See America First' Movement." *The Hemingway Review* 19.1(Fall, 1999)
- Martin, Lawrence H. "Hemingway's Constructed Africa: *Green Hills of Africa* and the Conventions of Colonial Sporting Books." In *Hemingway and the Natural World*. Ed. Robert E. Fleming. Moscow, ID: U of Idaho P, 1999.
- Pottle, Russ. "Travel." In *Ernest Hemingway in Context (Literature in Context Series)*. Eds. Debra A. Modellmog and Suzanne del Gizzo. Cambridge: Cambridge UP, 2013.
- Putnam, Ann. "Memory, Grief, and the Terrain of Desire: Hemingway's *Green Hills of Africa*." In *Hemingway and the Natural World*. Ed. Robert E. Fleming. Moscow, ID: U of Idaho P, 1999.
- Shaffer, Marguerite S. *See America First: Tourism and National Identity, 1880-1940*. Washington, DC: Smithsonian Books, 2001.
- Spurr, David. *The Rhetoric of Empire: Colonial Discourse in Journalism, Travel Writing, and Imperial Administration*. Durham: Duke UP, 1993.
- Stoneback, H. R. "Pilgrimage Variations: Hemingway's Sacred Landscapes." In *Hemingway: Eight Decades of Criticism*. Ed. Linda Wagner-Martin. East Lansing: Michigan State UP, 2009.
- Strychacz, Thomas. *Hemingway's Theaters of Masculinity*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2003.

Westling, Louise H. *The Green Breast of the New World: Landscape, Gender, and American Fiction*. Athens: U of Georgia P, 1996.

Whitley, Edward. "Race and Modernity in Theodore Roosevelt's and Ernest Hemingway's African Travel Writing." In *Issues in Travel Writing: Empires, Spectacle, and Displacement*. Ed. Kristi Siegel. New York: Peter Lang, 2002.

Wittman, Emily O. "Travel Writing." In *Ernest Hemingway in Context (Literature in Context Series)*. Eds. Debra Modellmog and Suzanne del Gizzo. Cambridge: Cambridge UP, 2013.

小笠原亜衣 「幻視する原初のアメリカ——『まずアメリカを見よう』キャンペーンとヘミングウェイの風景——」 野田研一 編著『<風景>のアメリカ文化学』京都:ミネルヴァ書房, 2011年.

清水一雄 「ヘミングウェイと暴力」 元山千歳・金田良夫・清水一雄・佐川和成 『アメリカ文学と暴力』 東京: 研究者出版, 1995年.

辻 秀雄 「ヘミングウェイのスタイル宣言——文学実践としての「アフリカの緑の丘」」 『アーネスト・ヘミングウェイ 21世紀から読む作家の地平』 日本ヘミングウェイ協会 編. 京都: 臨川書店, 2011年.

中尾秀博 「幸福の追求の追跡の幸福——「アフリカの緑の丘」について」 『ヘミングウェイを横断する テクストの変貌』 日本ヘミングウェイ協会 編 東京: 本の友社, 1999年.